

## 茸の舞姫

### 泉鏡花作

—

「空さん、これ、何？・・・」

と小児が訊くと、眞赤な鼻の頭を撫で、

「綺麗な衣服だよ。」

此は又餘りに情ない。町内の空若どのは、古筵の

兩端へ、笹の葉ぐるみ青竹を立て、繩を渡したの

に、幾つも蜘蛛の巣を引搦ませて、商賣をはじめた。

まじ／＼と控へた、が、然うした鼻の頭の赤いのだ

からこそ可けれ、嘴の黒い烏だと、其まゝの流灌頂。

で、お宗旨違の神社の境内、額の古びた木の鳥居の

傍に、裕福な仕舞家の土藏の羽目板を背後にして、

秋の祭禮に、日南に店を出して居る。

賣るのであらう、商人と一所に、のほんとは構へて、

晴れた空の、薄い雲を見て居るのだから。

飴は、今でも埋火に鍋を掛けて暖めながら、飴ん

棒と云ふ麻殻の軸に巻いて賣る、賑かな祭禮でも、

寂びたものゝ、お市、豆捻、薄荷糖なぞは、お婆さんが白髪に手拭を巻いて商ふ。何でも買ひなの小父さんは、紺の筒袖を突張らかして懐手の默然たるのみ。景氣の好いのは、蜜垂ぢや／＼と、菖蒲團子の附焼を、はた／＼と煽いで呼ばるゝ。．．．．．毎年顔も店も馴染の連中、場末から出る際商人。丹波鬼灯、海酸漿は手水鉢の傍大きな百日紅の樹の下に風船屋などと、よき所に陣を敷いたが、鳥居外のは、氣まぐれに山から出て來た、もの賣で。――

賣るのは果もの類。桃は遅い。小さな梨、粒林檎、栗は生のまゝ。．．．．．うでたのは、甘藷とゝもに店が違ふ。．．．．．奥州邊とは事かはつて、加越のあの邊に朱實は殆どない。こゝに林の如く賣るものは、黒く紫な山葡萄、黄と青の山茱萸を、蔓のまゝ、枝のまゝ、其の甘澁くて、且つ酸き事、狸が咽せて、兎が酔ひさうな珍味である。

此のおなじ店が、筵三枚、三軒ぶり。笠被た女が二人並んで、片端に頬被りした馬士のやうな親仁が

ひとり。で、一方の端の所に、件の空若が、繩に蜘蛛の巣を懸けて罷出た。

「これ、何さあ。」

「美しい衣服ぢやが買はんかね。」と鼻をひこつかす。

幾歳に成る……空の年紀が分らない。小兒の時から大人のやうで、大人になつても小兒に齊しい。彼は、元來、此の町に、立派な玄關を磨いた醫師のうちの、書生兼小使、と云ふが、それほどの用には立つまい、たゞ大食ひの食客。

世間體にも、容體にも、瘦せても袴とある處を、毎々薄汚れた綺の前垂を締めて居たのは食溢しが激しいからで——此の頃は人も死に、邸も他のものに成つた。其の醫師と云ふのは、町内の小兒の記憶に、もう可なり of 年輩だつたが、色の白い、指の細く美しい人で、ひどく權高な、其の癖婦のやうに、口を利くのが優しかつた。……細君は、赭ら顔、横ぶとりの肩の廣い大圓鬚。眦が下つて、脂

ぎつた頬へ、恚う．．．．．何時でもばら／＼とおくれ毛を下げて居た。下婢から成上つたとも言ふし、妾を直したのだとも云ふ。實の御新造は、人づきあひは固よりの事、門、背戸へ姿を見せず、座敷牢とまでもないが、奥まつた處に籠切りの、長年の狂女であつた。――で、赤鼻は、章魚とも河童ともつかぬ御難なのだから、待遇も態度も、河原の砂から拾つて來たやうな體であつたが、實は前妻の其の狂女がまうけた、實子で、然も長男で、此の生れたて變なのが、やゝ育つてからも變なため、其を氣にして氣が狂つた、御新造は、以前、國老の娘とか、それは美しい人であつたと言ふ．．．．．

或秋の半ば、夕より、大雷雨のあとが暴風雨に成つた、夜の四つ時十時過ぎと思ふ頃、凄じい電光の中を、蝸が鳴くやうな、うらさみしい、冴えた、透る、女の聲で、キイ／＼と笑ふのが、恰も樹の上、雲の中を傳ふやうに大空に高く響いて、此の町を二三度、四五度、風に吹廻されて往來した事がある．．．．．通魔がすると恐れて、老若、呼吸をひそめたが、あとで聞くと、其の晩、齋木（醫師の

姓)の御新造が家を拔出し、町内を彷徨つて、疲れ果てた身體を、杜の鳥居の柱に、黒髪を颯と亂した衣は鱗の、膚の雪の、電光に眞蒼なのが、瀧をなす雨に打たれつゝ、怪しき魚のやうに身震して跳ねたのを、追手が見つけて、醫師の其の家へかつぎ込んだ。間もなく枢と云ふ四方張の俎に載せて焼かれて了つた。齋木の御新造は、人魚に成つた、あの暴風雨は、北海の濱から、潮が迎ひに來たのだと言つた

一

其の翌月、急病で齋木國手が亡く成つた。あとは散々である。代診を養子に取立てゝあつたのが、成上りの其の肥満女と、家藏を賣つて行方知れず、  
下男下女、藥局の輩まで。勝手に掴み取りの、梟に枯葉で散り／＼ばら／＼。  
薬臭い寂しい邸は、冬の日賣家の札が貼られた。寂とした暮方、  
空地の水溜を町の用心水にしてある掃溜の芥棄場に、枯れた柳の夕霜に、赤い鼻を、薄ぼんやりと、提灯の如くぶら下げて立つて居たのは、屋根から落ちたか、空若どの。  
親は子に、空介とも空藏とも名づ

けはしない。待<sup>ま</sup>て、御<sup>ご</sup>典<sup>てん</sup>醫<sup>い</sup>であつた、彼<sup>かれ</sup>のお祖<sup>ぢ</sup>父<sup>い</sup>さ  
んが選<sup>えら</sup>んだので、本<sup>ほん</sup>名<sup>みやう</sup>は空<sup>もく</sup>之<sup>の</sup>丞<sup>じよう</sup>ださうである。

―― 時<sup>とき</sup>に、木<sup>き</sup>の鳥<sup>とり</sup>居<sup>ゐ</sup>へ引<sup>ひ</sup>返<sup>か</sup>さう。

こゝに、空若が其の怪しげなる蜘蛛の巣を擴げて居る、此の鳥居の向うの隅、以前醫師の邸の裏門のあつた處に、むかし番太郎と言つて、町内の走り使人、齋、非時の振廻り、香奠がへしの配歩行き、秋の夜番、冬は雪掻の手傳ひなどした親仁が住んだ。．．．半ば立腐りの長屋建て、掘立小屋と云ふ體なのが一棟ある。

町中が、空若を其處へ入れて、役に立つ立たないは話の外で、寄合持で、雑と扶持をして置くのであつた。

「空さん、何處から仕入れて來たよ。」

「縁の下か、廂合かな。」

其の蜘蛛の巣を見て、通掛りのものが、苦笑ひしながら、聲を懸けると、．．．

「違ひます。」

と鼻ぐるみ頭を掉つて、

「さとからぢや、はゝん。」と、ぽんと鼻を鳴

らすやうな咳拂をする。此奴が取澄まして如何にも

高慢で、且つ翁寂びる。争はれぬのは、お祖父さんの御典醫から、父典養に相傳して、脈を取つて、ト小指を刎ねた時の容體と少しも變らぬ。

空若が、さとと云ふのは、山、村里の其の里の意味でない。註をすれば里よりは山の義で、字に顯せば故郷に成る・・・實家に成る。

八九年前晩春の頃、同じ此の境内で、小兒が集つて凧を揚げて遊んで居た――空若は顔の大きい坊主頭で、誰よりも群を抜いて、のほんと脊が高いのに、その揚げる凧は絲を惜んで、一番低く、山上、松の空、桐の梢とある中に、僅に百日紅の枝とすれ／＼な所を舞つた。

大風來い、大風來い。

小風は、可厭、可厭・・・

幼い同士が威勢よく唄ふ中に、空若は唯一人、寒さうな懐手、絲巻を懷中に差込んだまゝ、此の唄にはむず／＼と襟を摺つて、頭を掉つて、そして面打

つて舞ふ己が凧に、合點々々をして見せて居た。

．．．．．にも係らず、烏が騒ぐ逢魔が時、凧と下した風も無いのに、空若の其の低い凧が、懐の絲巻をくるりと空に巻くと、キリ／＼と絲を張つて、一ツ星に颯と外れた。

「魔が来たよう。」

「天狗が取つたあ。」

ワツと怯えて、小兒たちの逃散る中を、團栗の轉がるやうに空若は黒くなつて、凧の影を何處までも追掛けた、其の時から、行方知れず。

五日目のおなじ晩方に、骨ばかりの凧を提げて、矢張り鳥居際に茫乎と立つて居た。天狗に攫はれたと言ふ事である。

それから時々、三日、五日、多い時は半月くらゐ、月に一度、或は三月に二度ほどづゝ、人間界に居なく成るのが例年で、いつか、其のあはれな母の然うした時も、空若は町には居なかつたのであつた。

「何處へ行つてござつたの。」

町の老人が問ふのに答へて、

「實家へだよう。」

と、それ言ふのである。此の町からは、間に大川を一つ隔てた、山から山へ、峰續きを分入るに相違ない、魔の棲むのは其處だと言ふから。

「お實家は何處ぢや。何う云ふ人が居さつしや

る。」

「實家の事かねえ、はゝん。」

スポンと栓を抜く、件の咳を一つすると、これと同時に、鼻が尖り、眉が引釣り、額の皺が縊れるかと凹むや、眼が光る。……歯が鳴り、舌が滑に赤くなつて、滔々として辨舌鋭く、不思議に魔界の消息を洩す。——これを聞いたものは、親たちも、祖父祖母も、其の兒、孫などには決して話さなかつた。

幼いものが、生意氣に直接に打撞る事がある。

「空やい、實家は何處だ。」

「實家の事かい、はゝん。」

や、もう其の咳で、小父さんのお醫師さんの、膚  
觸りの柔かい、冷りとした手で、脈所をぎうと握ら  
れたほど、悚然とするのに、忽ち鼻が尖り、眉が逆  
立ち、額の皺が、びり／＼と蠢いて眼が血走  
る。・・・・・

聞く所か、これに怯えて、ワツと遁げる。

「實家はな。」

と背後から、蔽はれかゝつて、小兒の目には小山  
の如く追つて来る。

「御免なさい。」

「きやつ！」

其の時に限つては、空若の耳が且つ動くと言ふ

―― 嘘を吐け。

海また湖へ、信心の投網を颯と打つて、水に光るもの、輝くものゝ、佛像、名剣を得たと言つても、賣れない前には、其の一日の日當が何うなつた、米は兩につき三升、と云ふのだから、此の如き空若が番太郎小屋に唯ぼうとして生きて居るだけでは、世の中が納まらぬ。

入費は、町中持合ひとした所で、半ば白癡で――  
たとひ其が、實家と言ふ時、魔の魂が入替るとは  
言へ――半ば狂人であるものを、肝心火の元の  
用心は何とする。・・・・炭團、埋火、楯、柴  
を焚いて煙は揚げずとも、大切な事である。

方便な事には、空若は切刃の一件で、山に實家を  
持つて以來、未だ嘗て火食をしない。多くは果物を  
餌とする。松葉を噛めば、椎なんぞ葉までも頬張る。  
瓜の皮、西瓜の種も差支へぬ。桃、栗、柿、大得意  
で、烏や鳶は、むしや／＼と裂いて鱈だし、蝸牛蟲  
やなめくぢは刺身に扱ふ。春は若草、薺、茅花、つ

く／＼しのお精進・・・蕪を嚙る。牛蒡、人  
參は縦に啣へる。

此の、秋は又いつも、食通大得意、と云ふものは、  
木の實時なり、實り頃、實家の土産の雉、山鳥、小  
雀、山雀、四十雀、色どりの色羽を、ばら／＼と辻  
に撒き、廂に散らす。但、魚類に至つては、金魚も  
目高も決して食はぬ。

最も得意なのは、も一つ苜で、名も知らぬ、可恐  
しい、故郷の蜂谷の、蓬々しい名の無い菌も、皮づゝ  
みの餡ころ餅ぼた／＼と零すが如く、袂に襟に溢れ  
さして、山野の珍味に厭かせ給へる殿様が、此にば  
かりは、露のやうなよだれを垂し、  
「牛肉のひれや、人間の娘より、柔々として膏が  
滴る・・・甘味ぞのツ。」

は凄じい。

が、恠く菌を嗜む所爲だらうと人は言つた、まだ  
空若に不思議なのは、日南では、影形が薄ぼやけて、  
陰では、汚れたどろ／＼の衣の縞目も判明す

る。．．．．．委しく言へば、晝は影法師に肖て居て、夜は明かなのであつた。

却説、店を並べた、山茱萸、山葡萄の如きは、此の老舗には餘り資本が掛らな過ぎて、恐らくお錢に成るまいと考へたらしい。で、精一杯に賣るものは。

「何だい、こりや！」

「美しい衣服ぢやがい。」

氏は呆れもしない顔して、これは買ひもせず、貰ひもしないで、隣の木の實に小遣を出して、枝を蔓を提げるのを、じろ／＼と流眊して、世に伯樂なし矣、とソレ青天井を向いて、えへら／＼と嘲笑ふ。．．．．．

其の笑が、日南に居て、蜘蛛の巢の影になるから、鳥が嘴を開けたか、猫が欠伸をしたやうに、人間離れをして、笑の意味を爲さないで、ぱくりと成る。．．．．．

と言ふもので、筵を並べて、笠を被つて坐つた、  
山茱萸、山葡萄の婦どもが、件のぼやけさ加減に何  
となく誘はれて、此の姿も、又何うやら太陽の色に  
朧々として見える。

蒼い空、薄雲よ。

人の形が、然うした霧の裡に薄いと、可怪や、掠  
れて、明さまには見えない筈の、扱いて搦めた纏れ  
糸の、蜘蛛の圍の幻影が、幻影が。

眞綿をスイと繰つたほどに判然と見えるのに、薄  
紅の蝶、淺黄の蝶、青白い蝶、黄色な蝶、金絲銀絲  
や消え際の草葉螟蛉、金龜蟲、蠅の、蒼蠅、赤蠅。

羽ばかり秋の蝉、蝸の身の經帷子、いろ／＼の蟲  
の死骸ながら巢を引筆つて來たらしい。それ等が艶々  
と色に出る。

あれ見よ、其の蜘蛛の圍に、ちら／＼と水銀の散  
つた玉のやうな露がきらめく……

此の空の晴れたのに。――

#### 四

これには仔細がある。

神の氏子の此の數々の町に、やがて、あやかしのあらうとてか——其の年、秋の此の祭禮に限つて、見馴れない商人が、妙な、異つたものを賣つた。宮の入口に、新しい石の鳥居の前に立つた、白い幟の下に店を出して、其處に鬻ぐは何等のものぞ。

河豚の皮の水鐵砲。

蘆の軸に、黒斑の皮を小袋に巻いたのを、握つて離す、と、スポイト仕掛けで、衝と水が進る。鰻は多し、又壮に膳に上す國で、魚市は言ふにも及ばず、市内到る處の魚屋の店に、春と成ると、此の怪い魚を鬻がない處はない。

が、をかしたな賣方、一頭々々を、あの鰭の黄ばんだ、黒斑なのを、ずぼんと裏返しに、どろりと脂切つて、ぬら／＼と白い腹を仰向けて並べて置く。

もし唯二つ並ばうものなら、切落して生々しい女の乳房だ。……然も眞中に、ツキリと庖丁

目を入れた處が、パクリと赤黒い口を開いて、西施の腹の裂目を曝す……

中から、ずる／＼と引出した、長々とある百腸を、巻かして、束ねて、ぬる／＼と重ねて、白腸、黄腸と稱へて賣る。……剩へ、目の赤い親仁や、襪襪半纏の漢等、俗に「穢太」と云ふ腸拾ひが、出刀庖丁を斜に構へて、此の腸を切賣する。

待て、我が食通の如きは、これに較ぶれば處女の膳であらう。

要するに、市、町の人は、擧つて、手足のない、女の白い胸中を筒切にして食ふらしい。

其の皮の水鐵砲。小兒は争つて買競つて、手の腥いのを厭ひなく、參詣群集の隙を見ては、シユツ。

「打上げ！」

「流星！」

と花火に擬て、縦横や十文字。

いや、隙どころか、件の空若をば侮つて、其の蜘蛛

蜘蛛の巣の店を打つた。

白玉の露はこれである。

其の露の鏤むばかり、蜘蛛の圍に色籠めて、いで  
膚寒き夕と成んぬ。山から風す風一陣。

はや篝火の夜にこそ。

## 五

笛も、太鼓も音を絶えて、唯御手洗の水の音。寂  
 として其の夜更け行く。此の宮の境内に、階の方か  
 ら、カタン／＼、三ツ四ツ七ツ足駄の齒の高響。

脊丈のはども惟はるゝ、あの百日紅の樹の枝に、  
 眞黒な立烏帽子、鈍色に黄を交へた練衣に、水色の  
 さしぬきした神官の姿一體。社殿の雪洞も早や影の  
 届かぬ、暗夜の中に顯れたのが、やゝ屈みなりに腰  
 を捻つて、其の百日紅の梢を覗いた、霧に朦朧と火  
 が映つて、ほんのりと薄紅の射したのは、其處に焚  
 落した篝火の殘餘である。

此の明で、白い襟、烏帽子の紐の縹花なのがほの  
 かに見える。澁紙した顔に黒痘痕、塵を飛ばしたや  
 うで、尖がつた目の光、髪はげ、眉薄く、頬骨の張  
 った、其の顔容を見ないでも、夜露ばかり雨のない  
 のに、其の高足駄の音で分る、本田撰理と申す、此  
 の宮の杜司で・・・草履か高足駄の他は、下  
 駄を穿かないお神官。

小兒が社殿に遊ぶ時、摺違つて通つても、じろりと一睨みをくれるばかり。威あつて容易く口を利かぬ。それを可恐くは思はぬが、此の杜司の一子に、時丸と云ふのがあつて、おなじ悪戯盛であるから、或時、大勢が軍ごつこの、番に當つて、一子時丸が馬に成つた、叱！ 騎つた奴がある。．．．．．で、回廊を這つた。

大喝一聲、太鼓の皮の裂けた音して、

「無禮もの！」

社務所を虎の如く猛然として顯れたのは撰理の大人で。

「動！」と喚くと、一子時丸の襟首を、長袖の

まゝ引掴み、壇を倒に引落し、ずる／＼と廣前を、

石の大鉢の許に掴み去つて、いきなり衣帯を剥いで裸にすると、天窓から柄杓で浴びせた。

「鹽を持って、鹽を持って。」

鹽どころぢやない、百日紅の樹を前にした、社務所と別な住居から、よち／＼、臀を横に振つて、肥

つた色白な大圓鬘が、夢中で駈けて来て、一子の水垢離を留めようとして、身を楯に逸るのを、仰向けに、ドンと蹴倒いて、

「汚れものが、退り居れ。――鹽を持って、鹽を持って、鹽を持って、」

いや、小兒等は一すくみ。

あの顔一目で縮み上げる……

が、大人に道徳と云ふはそぐはぬ。博學深識の從七位、花咲く霧に烏帽子は、大宮人の風情がある。

「火を、ようしめせよ、燠が散るぞよ。」

と烏帽子を下向けに、其の住居へ聲を懸けて、樹の下を出しなの時、

「雨は何うぢや……些と曇つたぞ。」

と、密と、袖を捲きながら、紅白の旗のひら／＼する、小松大松のあたりを見た。

「あの、大旗が濡れては成らぬが、降りもせまいかな。」

と半ば呟き／＼、颯と巻袖の笏を上げつゝ、唯恠

う、石の鳥居の彼方なる、高き帆柱の如き旗棹の空  
を仰ぎながら、カタリノと足駄を踏んで、斜めに  
木の鳥居に近づくと、呀！ 鼻の提灯眞赤な猿の面、  
飴屋一軒、犬も居らぬに、空若が明かに店を張つて、  
暗がり、のほんとして居る。

馬鹿が拍手を拍つた。

「御前様。」

「空か。」

「ひゝゝひゝ。」

「何をして居る。」

「少しも賣れませんか。」

「馬鹿が。」

と夜陰に、一つ洞穴を抜けるやうな乾びた聲の大  
音で、

「何を賣るや。」

「美しい衣服だがなう。」

「何？」

暗を見透かすやうにすると、ものゝ静かさ、松の  
香が芬とする。

鼠色の石持、黒い袴を穿いた宮奴が、百日紅の下  
 に影の如く踞まつて、びしゃツノと、手桶を片手  
 に、箒で水を打つのが見える、と・・・其處  
 へー

あれノ、何ぢや、ばゞばゞと赤く、かなで  
 書いた字が宙に出て、白い四角な燈が通る、三個の  
 人影、六本の草鞋の脚。

燈一つに附着合つて、スツと鳥居を潜つて來たの  
 は、三人齊しく山伏也。白衣に白布の顛卷したが、  
 面こそは異形なれ。丹塗の天狗に、緑青色の般若と、  
 面白く鼻の黄なる狐である。魔とも、妖怪變化とも、  
 もし此が通魔なら、あの火をしめす宮奴が氣絶をし  
 ないで堪へるものか。で、般若は、一挺の斧を提げ、  
 天狗は注連結ひたる半弓に矢を取添へ、狐は腰に一  
 口の太刀を佩く。

中に荒縄の太いので、笈摺めかいて、灯した角行

燈を荷つたのは天狗である。が、これは、勇しき男の獅子舞、媚かしき女の祇園囃子などに齊しく、特に夜に入つて練歩行く、祭の催物の一つで、意味は分らぬ、（やしこばゞ）と稱ふる若連中のすさみである。それ、腰にさげ、帯にさした、法螺の貝と横笛に拍子を合せて、

やしこばゞ、うばゞ、

うば、うば、うばゞ。

火を一つ貸せや、

火はまだ打たぬ。

あれ、あの山に、火が一つ見えるぞ。

やしこばゞ、うばゞ、

うば、うば、うばゞ。

．．．．．と唄ふ、たゞそれだけを繰返しながら、矢をはぎ、斧を舞はし、太刀をかざして、頭から頭なりに、首を一つづるりと振つて、交る／＼に緩く舞ふ。舞果てると鼻の尖に指を立て、臨兵闘者云々と九字を切る。一體、悪魔を拂ふ趣意だと云ふが、何うやら夜陰の此の業體は、魑魅魍魎の類を、

よびだ 呼出し招き寄せるに髣髴として、實は、希有に、怪  
しく不氣味なものである。

然も些と來やうが遅い。渠等は社の抜裏の、くら  
がり坂とて、穴のやうな中を抜けて弗と此處へ顯れ  
たが、坂下に大川一つ、橋を向うへ越すと、山を屏  
風に繰らした、翠帳紅閨の衢がある。おなじ時に祭  
だから、宵から、其の軒、格子先を練廻つて、こゝ  
に時おくれたのであらう。が、あれ、何處ともなく  
瀬の音して、雨雲の一際黒く、大なる蜘蛛の浸んだ  
やうな、峰の天狗松の常燈明の一つ灯が、地獄の一  
つ星の如く見ゆるにつけても、何うやら三體の通魔  
めく。

渠等は、すつと來て通り際に、從七位の神官の姿  
を見て、黙つて、言ひ合せたやうに、音の無い草鞋  
を留めた。

此の行燈で、巢に搦んだいろ／＼の蟲は、空蟬の  
其の羅の柳條目も見えた。灯に蛾よりも鮮明である。  
但し異形な山伏の、天狗、般若、狐も見えた。が、  
一際色は、空若の鼻の尖で、

「えら美しい衣服ぢやるがな。」

と蠢かいて言つた處は、青竹二本に渡したにつけても、魔道に於ける七夕の貸小袖と云ふ趣である。

從七位の摂理の太夫は、黒痘痕の皺を歪めて、苦笑して、

「白癡が。今にはじめぬ事ぢやが、先づ此が衣類ともせい．．．何處の棒杭が此を着るよ。餘りの事ゆゑ尋ねるが、おのれとても、氏子の一人ぢや、恚う訊くのも、氏神様の、」

と嚴に袖に笏を立て、

「恐多いが、思召ぢやと然う思へ。誰が、着るよ、此の白癡、蜘蛛の巣を。」

「綺麗な喃、若い婦人ぢやい。」

「何。」

「綺麗な若い婦人は、お姫様ぢやるがい、其のお姫様が着さつしやるよ。」

「天井か、縁の下か、そんなものが何處に居る？」  
と從七位は又苦い顔。

## 七

空若<sup>もくわか</sup>は筵<sup>むしろ</sup>の上<sup>うへ</sup>から、古綿<sup>ふるわた</sup>を啣<sup>くは</sup>へたやうな唇<sup>くちびる</sup>を仰向<sup>あをむ</sup>けに反<sup>そ</sup>らして、

「あんな事<sup>こと</sup>を言<sup>い</sup>つて、從七位<sup>じゆあさま</sup>様、天井<sup>てんじやう</sup>や縁<sup>えん</sup>の下<sup>した</sup>にお姫<sup>ひめさま</sup>様が居<sup>ゐ</sup>るものかよ。」

馬鹿<sup>ばか</sup>にしないもんだ、と抵抗<sup>はむかひじち</sup>面<sup>めん</sup>は可<sup>よ</sup>かつたが、

「解<sup>わか</sup>つた事<sup>こと</sup>を、草<sup>くさ</sup>の中<sup>なか</sup>に居<sup>ゐ</sup>るでないかね・・・

・・・

果然<sup>はたして</sup>、言<sup>い</sup>ふ事<sup>こと</sup>が此<sup>これ</sup>である。

「然<sup>さ</sup>うぢやらう、草<sup>くさ</sup>の中<sup>なか</sup>で無<sup>な</sup>うて、そんなものが居<sup>ゐ</sup>るものか。あゝ、何<sup>な</sup>んと云<sup>い</sup>ふ、どんな蟲<sup>むし</sup>ぢやい。」

「あれ、蟲<sup>むし</sup>だとう、從七位<sup>じゆあさま</sup>様、えらい博識<sup>もくしり</sup>な神<sup>かん</sup>主<sup>ぬし</sup>様がよ。お姫<sup>ひめさま</sup>様は茸<sup>きのこ</sup>だものをや。・・・蟲<sup>むし</sup>だとよう、あはゝ、あはゝ。」と、火食<sup>くわしよく</sup>せぬ奴<sup>やつ</sup>の齒<sup>は</sup>の白<sup>しろ</sup>さ、べろんと舌<sup>した</sup>の赤<sup>あか</sup>い事<sup>こと</sup>。

「茸<sup>きのこ</sup>だと・・・これ、白癡<sup>たはげ</sup>。聞<sup>き</sup>くものはな  
いが、餘<sup>あま</sup>り不<sup>ふ</sup>便<sup>びん</sup>ぢや。氏神<sup>うぢがみさま</sup>様のお尋<sup>たづ</sup>ねだと思<sup>おも</sup>へ。茸<sup>きのこ</sup>  
が婦人<sup>をんな</sup>か、おのれの目<sup>め</sup>には。」

「紅茸と言ふだあね、薄紅うて、白うて、美しい綺麗な婦人よ。あれ、知らつしやんねえがな、此位な事をや。」

從七位は、白癡の毒氣を避けるが如く、笏を廻して、二つ三つ這奴の鼻の尖を拂ひながら、

「ふん、で、其の、おのれが婦は、蜘蛛の巣を被つて草原に寝て居るぢやな。」

「寝る時は裸體だよ。」

「む、茸はな。」

「起きとつても裸體だになう。――」

粧飾す時に、薄らと裸體に巻く寶もの、美しい衣服

だよ。此は………」

「うむ、天の恵は洪大ぢや。茸にもさて、被るものをお授けなさるぢやな。」

「違ふよ。――お姫様の、めしものを持って――」

「――侍女が然う言ふだよ。」

「何ぢや、侍女とは。」

「矢張り、はあ、眞白な膚に薄紅のさした紅茸だ

あね。おなじものでも位が違ふだ。人間に、神主様

も飴屋もあると同一でな。……從七位様は何も知らつしやらねえ。あは、松茸なんぞは正七位の御前様だ。錦の袴で、のほんとして、お姫様を視めて居るだ。」

「黙れ！ 白癡！……と、此様なものぢや。」

と從七位は、山伏どもを、じろ／＼と横目に掛けつゝ、過言を叱する威を示して、

「で、で、其の衣服は何うぢやい。」

「は、ん、ん、姫様のおめしもの持て、」

侍女が然う言ふと、黒い所へ、黄色と紅條の縞を持つた女郎蜘蛛の肥えた奴が、両手で、へい、此の金銀珠玉だや、其を、其の織込んだ、透通る錦を捧げて、赤棟蛇と言ふだね、燃える炎のやうな蛇の鱗へ、馬乗りに乗つて、谷底から駈けて來ると、蜘蛛も光れば蛇も光る。」

と物語る。君が所謂實家の話柄とて、喋舌る空若の目が光る。と、黒痘痕の眼も輝き、天狗、般若、白狐の、六箇の眼玉も赫と成る。

「まだ足りないで、燈を——燈を、と細い聲して言ふと、土からも湧けば、大木の幹にも傳はる、土蜘蛛だ、朽木だ、山蛭だ、俺が實家は祭禮の蒼い萬燈、紫色の揃ひの提灯、さいかち茨の赤い山車だ。」

と言ふ……葉ながら散つた、山葡萄と山茱萸の夜露が化けた風情にも、深山の状が思はるゝ。

「何時でも俺は、氣の向いた時、勝手にふらりと實家へ行くだが、今度は山から迎ひが来たよ。祭禮に就いてだ。此の間、宵に大雨のどツと降つた夜さり、あの用心池の水溜の所を通ると、掃溜の前に、圓い笠を着た黒いものが蹲踞んで居たがね、俺を見ると、ぬうと立つて、すぽん／＼と歩行き出して、雲の底に月のある、どしや降の中だな、時々、のほん、と立停つては俺が方をふり向いて見見するだ。頭からずぼりと黒い奴で、顔は分んねえだが、此方呼びさうにするから、其後へついて行くと、石の鳥居から曲つて入つて、此方へ来ると見えなく成つた——

俺おらあ家うちへ入はらうと思おもふと、向むかうの百さるすべり日ひ紅こうの樹きの下した  
に立たつて居ゐる・・・・・

指さした方かたを、從じゆ七み位ゐが見み返かへつた時とき、もう其そ處こに、  
宮みや奴つこの影かげはなかつた。

御み手たらし洗あの音おとも途と絶だえて、時し雨ぐれのやうな川かは瀬せが響ひび  
く。  
・  
・  
・  
・  
・

「其のまんま消えたがなう。お社の柵の横手を、坂の方へ行つたらしいで、後へ、すた／＼。坂の下口で氣が附くと、驚かしやがらい、畜生めが。俺の袖の中から、皺びた、いぼ／＼のある蒼い顔を出して笑つた。――山は御祭禮で、お迎ひだ――とよう。……此奴はよ、大い葦で、釣鐘葦と云うて、叩くとガーンと音のする、甲羅經た親仁よ。……巫山戯た爺が、驚かしやがつて、頭をコンとお見舞申さうと思つたりや、もう、すつこ抜けて、坂の中途の檜の木の下に雨宿りと澄ましてけつかる。

川端へ着くと、薄らと月が出たよ。大川はいつもより幅が廣い、霧で茫として海見たやうだ。流の上の眞中へな、小船が一艘。――先刻こゝで木の實を賣つて居つた婦のやうな、丸い笠きた、白い女が二人乗つて、川下から流を逆に泳いで通る、漕ぐぢやねえ。底蛇と云うて、川に居る蛇が船に乗ツけて底を渡るだもの。船頭なんか、要るものかい、はゝ

ん。  
」

と高慢な笑ひ方で、

「船からよ、白い手で招くだね。黒親仁は俺を負

つて、ざぶ／＼と流を渡つて、船に乗った。二人の

婦人は、柴に附着けて賣られたつけ、毒だ言うて川

下へ流されたのが遁げて来たゞね。

ずつと川上に行くくと、其處等は濁らぬ。山奥の方

は明い月だ。眞蒼な激い流が、白く颯と分れると、

大な蛇が迎ひに来た、でないと船が、もう其の上は

小蛇の力で動かんてな。底を背負つて、一廻りまは

つて、船首へ、鎌首を擡げて泳ぐ、龍頭の船と言ふ

だとよ。俺は殿様だ。・・・

大巖の岸へ着くと、其の鎌首で、親仁の頭をドン

と敲いて、（お先へ。）だつてよ、べろりと赤い舌

を出して笑つて谷へ隠れた。山路はぞろ／＼と皆、

お祭禮の茸だね。坊主様も尼様も交つてよ、尼は大

勢、びしょ／＼びしょ／＼と濕つた所を、坊主様は、

すた／＼すた／＼乾いた土を行く。濕地茸、木茸、

針茸、革茸、羊肚茸、白茸、やあ、一杯だ一杯だ。」

と筵の上を膝で刻んで、嬉しさうに、ニヤ／＼して、

「初茸なんか、親孝行で、夜遊びはいたしません、指を啣へて居るだよ。……さあ、お姫様の踊がはじまる。」

と、首を横に掉つて手を敲いて、

「お姫様も一人ではない。侍女は千人だ。女郎蜘蛛が蛇に乗つちや、ぞろ／＼ぞろ／＼皆な衣裳を持つて来ると、すつと巻いて、袖を開く。裾を浮かすと、紅玉に乳が透き、緑玉に股が映る、金剛石に肩が輝く。薄紅い影、青い隈取り、水晶のやうな可愛い目、珊瑚の玉は唇よ。揃つて、すつ、はらりと、すつ、袖をば、裳をば、碧に靡かし、紫に颯と捌く、薄紅を翻す。」

笛が聞える、鼓が鳴る。ひゆうら、ひゆうら、ツテン、テン、おひやら、ひゆうい、チテン、テン、ひやあら／＼、トテン、テン。」

廓のしらべか、松風か、ひゆうら、ひゆうら、ツテン、テン。あらず、天狗の囃子であらう、杳若の聲を遙に呼交す。

「唄は、やしこばゞの唄なんだよ、ひゆうら／＼、  
ツテン、テン、

やしこばゞ、うばゞ、

うば、うば、うばゞ、

火を一つくれや・・・」

と、唄ふに連れて、囃子に連れて、少しづゝ手足の科した、三個の這個山伏が、腰を入れ、肩を撓め、首を振つて、踊出す。太刀、斧、弓矢に似もつかず、手足のこなしは、しなやかなものである。

従七位が、首を廻いて、笏を振つて、臀を廻いた。

二本の幟はた／＼と翻り、虚空を落と天狗風。

蜘蛛の圍の蟲晃々と輝いて、鏘然、珠玉の響あり。

「幾千金ですか。」

般若の山伏が恚う聞いた。其の聲の艶に媚かしいのを、神官は怪んだが、やがて三人とも假装を脱いで、裸にして縷無き雪の膚を顯すのを見ると、いづれも、・・・血色うつくしき、肌理細かなる婦人である。

「錢ではないよ、皆な裸に成れば一反づゝ遣る。」  
「價を問はれた時、空若が蜘蛛の巣を指して、然う  
言つたからであつた。」

裸體に、被いて、大旗の下を行く三人の姿は、神  
官の目に、實に、紅玉、碧玉、金剛石、眞珠、珊瑚  
を星の如く鑲めた羅綾の如く見えたのである。

神官は高足駄で、よろ／＼と成つて、鳥居に入る  
と、住居へ行かず、階をあがつて拜殿に入った。が、  
額の下の高麗べりの疊の隅に、人形のやうに成つて  
坐睡りをして居た、十四に成る緋の袴の巫女を、い  
きなり、引立てゝ、袴を脱がせ、衣を剥いだ。・  
・・此の巫女は、當年初に仕へたので、恚うさ  
れるのが掟だと思つて自由に成つたさうである。

宮奴が仰天した、馬顔の、瘦せた、貧相な中年も  
ので、豫て呐であつた。

「従、従、従、従、従七位、七位様、何、何、何、  
何事！」

笏で、びしやりと胸を打つて、

「退りをらうぞ。」

で、蟲の死んだ蜘蛛の巣を、巫女の頭に翳したのである。

嘗て、山神の社に奉行した時、丑の時參詣を谷へ蹴込んだり、と告つた、大權威の摂理太夫は、これから發狂した。

――既に、廓の藝妓三人が、あるまじき、其の夜、其の怪しき假装をして内證で練つた、と云ふのが、尋常ごとではない。

十日を措かず、町内の娘が一人、白晝、素裸に成つて格子から抜けて出た。門から手招きする空若の、あの、寶玉の錦が欲しいのであつた。餘りの事に、これは親さへ組留められず、あれ／＼と追ふ間に、番太郎へ飛込んだ。

市の町々から、やがて、木蓮が散るやうに、幾たり人となく女が舞込む。

――夜、其の小屋を見ると、おなじやうな姿が、白い陽炎の如く、空若の鼻を取巻いて居るのであつ

た。

【完】